からだが変わる 保育が変わる ④からだが語るもの

小泉恵津子
(小さい人間たちの広場)

はじめに

公立保育所保育としての経済的安定や拘束を離れて10ヶ月、様々な情報の中から自由に自分らしく生きる場を創り出そうと模索している。その中で、熱心に学びながら地に足をつけ、「今、私達がこの子にできることから...」と、自主保育の準備に集う母親グループと出会った。起点は「ウテキアニ」(アヌ語、互に手と手を取り合います)＝愛という助産院で、魂の宿った時からの小さな生命と家族のドラマを、各々がよく語っている。温かく自由で創造的なエネルギーは我家にも及び、親子が遊んで帰った後は、散らかった家の中に和やかな空気が漂い、私を支え励ましてくれる。新しい学びの場である。

25年の保育生活をふり返ると、楽しかった思い出や喜びと共に暗い部分が思われる。子どもの前に立ち、保育で居ようとする私に、ありのままの自分の居方で生きることを見つけ、私を育ててくれたそれぞれの親や場が浮かぶ。社会や家族、家庭が変わった。保育指針が変わり保育の形を変えた所もある。今、自分の居場所を変え新たな生き方を探す私に、節目に辿り着いた満足感よりはるかに大きな声で、本心をからだの奥にしまい込んで頑張ってきた心の痛みや傷が、内側からムズムズと訴えてくる。

新しい生命は生まれる以前から、大人社会の影響を受けている。人生の早い時期から幼い生命に関わる私達は、安心して自分を預けられるかどうかを、家族と共に試される。周囲の大人が本当に自分を大切に思っていてくれるかどうかを感じとっている。心をはずませ入学し、まもなく荒れるという彼らのからだは、何を訴えているのだろう。共に過した子ども達は、何を感じ何を学び取っていったのだろう。

I. 「あったかい卵 見つけた! ヒヨコになるよ!」

A夫(父)とB子(年長)は、卵を拾う大人の後について遊んでいた。A夫が鶏の下にあった卵を見つけ、「あったかい! これ抱いてたからヒヨコになるよ!」と、両手にのせて来た。兄を真似るようにB子も、「あったかい!」と見つける。自転車遊びに来ていた二人は、新聞紙にくるんだり上着を脱いでカゴに入れたり、手袋にも入れ慎重に――持ち帰って行った。その後、A夫は先ずストーブの前に空容器を運んだ。そこに二本の

棒を渡し、卵をはさむように置いて暖めた。B子は、卵をティッシュペーパーで緩重にも包み、大好きな人形の傍に寄り添わせるように置き、ベッドに寝かせた。

「男の子と女の子は違うね」と、周囲の大人の間でひとしきり楽しい話題になった。一年違いの兄は科学的に暖める事を試み、妹は自分を温かく抱く母親と人形のイメージを重ね、思いを託している。

二人の子どもが、ヒヨコの誕生を期待し、旺盛な好奇心に知恵を働かせ試みようとする言動や母親に憧れるゆったりとしたひとつひとつの行姿からは、なにげない生活の中から、いつの間にかそれぞれの受け止め方で学び取っているものが表され、語られている。

II. 1) 紙芝居の時間 ―関係の無い関係の中で―

必要な手助けにできるだけ応えられるよう配慮して3名の保育士が担当し、年中組をスタートした。障害のある子にも懇ろに接してくれるパートと20年以上経験のあるAとBだが、二人の子ども観や保育方針、保育方法は違う。要求や拒否などはっきり意志を表わし、子ども達が主張しながら行動する場面が多いクラスである。担任中、Aは「こういう保育は初めて」と幾度か困ったように口にしていた。

ある日、午睡前にAは紙芝居を始めた。集って座っている子の後で3人の男子が、布団の上を走り回り騒いでいる。近くに座っている子もほとんどが、互に話したりふざけたりしている。Aは様子を見ることもなく平然と読み続けている。しばらく見届していたが、Bは男子に声をかけた。「紙芝居を見ている人に迷惑でしょ! 見たくない人は見なくていいから邪魔しないの!」様子を見て反応した子ども達の幾人かは、Aの近くに寄り寄り顔を向けたが、何事も無いように再び平然と読み始めると、すぐに散漫な状態となった。Bは、Aの関係なくとも関係ないよという態度に腹が立っていた。子ども達はAのからだに語りかけることばに反応し、関係をもたないからだの手型を写している。

保育者の仕事の実感や自分で決めたことの実行に求めている人は、その場の関係の中で何が起り、子どもが何を学習しているのかに注意が向かなくなる。関係が切れている関係の中で保育士の声は、子どもに届いていても心には届かない。程々に保育士に付き合うことで保育士の要求に合わせていく、こんな居方を学んでいる。

II. ② おやつ時間—ねばならない—

昼のおかわりを喜んで食べたS夫は、おやつにしようとして入室し始めた頃、「今日、おやついらない」と、Bに伝えに来た。「お昼、いっぱい食べたもんね。皆のおやつがほこりにならないように遊んでいて」と、やりとりする様子も周囲の子ども達も見聞きしていた。それぞれがどり気なくおやつを食べている頃、Bはトイレに行った。戻ってみると、S夫が怒りに満ちたからだを固め、赤な顔を下に向け座っている。「どうした？いらないうって言ってたじゃん!」「何があったの？」と声をかけると、周囲の子ども達がロク々に答え出す。「先生に怒られた」、「いらないうって言ったから座ってなさいだつて」、「友達に状況を伝え始めた途端に、大粒の悔し涙がポロポロと流れ出した。「ごめん、先生が言って行かなかったから...」と謝ると、Aが「あんまり勝手な事ばかり言ってるから怒ってやっただよー」と、自信はなさそうだったが力を込めて言う。Bは事の次第をAに伝え抗議した。強者Aの前で、弱者S夫はからだを縮め、顔面を閉じていた。保母同志の緊張したやりとりを、子どもによっては注意深く見ていた。子ども達は年度の早いうちから対応のし方の違いに気付き、状況に応じて試したり使いかけていたりしていた。

子どもが帰った後、保育の違いや方向について度々話し合った。「こんな保育初めて」「〇〇のような子、どうしていいかわかんない!」「フリーが多かったから年間計画なんて書いたことないよ」など、平気で言っていた。場面を例に、自分に置き換えて子どもの思いを探って捉えようとする。「本当!よく解る」など、少しずつ生活の枠組みやパターンをふり返り話すようになっていった。

ルールや形が決められている事で安心できることもある。然し、本当に自由に生きる事を学び取る為には、放任ではなく、意志を表わし自分の行動のし方を選び、自信をもって様々な場に関わる力をつける体験が必要である。子どもの時代の大切な試行錯誤の時、ルールや枠、形、既成概念等に依存したままの大人によって、支配的な指導や援助を受け続けるならば、様々な状況や環境との関わりの中から生まれ育つ内なるまじりは育くまれるだろうか。私達大人は、本当の自由な生き方を知って、その方向を示してあげているのだろうか。乳幼児期は、見えない人間の根っこを、力強く十分に育てる為にとても重要な時期である。

III. 開放を立て前とする閉じられた施設

Bが労災で休暇中の事である。様々な生活条件の変化などで寝水声が出なくなったということで、先に休暇

に入っていたAが、Bと仕事はできないと所長に言って、理由や説明もなく保護者に担任変更の通知が配られた。Aは乳児、乳児のCが年中に、Bはフリーへ簡単に変えられた。休み明け、初めて自分のクラスが物置きになり、新しい気分でスタートしたいという新任の意志で、早々に引越しをすませ色変えされていることを知った。居場所の消えた衝動で、気が脱け落ちた自分も、やっと打合せの場に向かい、「今日は何もできません」と言うなり涙があふれ、物置き場に戻りボーッとしていた。人の存在や心を軽々しく扱う保育者集団の象徴だと感じ、今年が終りと決めていた私には、益々本物の保育の場への方向を確かめ、怒りと悲しみがゴチャゴチャにあふれてきていた。「先生 どうした?元気がないみたい...」「いつもと違う...心配」と入れ替り子ども声をかけてくれる。傍にくっついて離れない子の温かさは、黙って居ながらどこかにふれ、癒してくれる。解らないままに危さを受け止め、しっかり寄り添ってもらっている。保育の場は、生きる者同士、大人も子どもも支え合っている。子どもの活力は、大きな恵みである。

子どもの施設では、適応力に乗じて度々外向きの顔を作って見せる事ができる。然し、先ず健全な成長を考慮すべき所であり、個人や施設の対面の為には、子どもの生活を安易に乱してはいけない。保護されるべき人は、それにふさわしい方法で十分に保護されるべきである。若い保母の要求に、「話し合いはしません。」と言いきり、「所長に言われたから」と、それまで関わってきた保母を無視するかのように話す保母。臨時やパート保母の増えた現状で、保母である所長や経験豊富な保母は、保育者集団を自ら育てる立場にならなければいけない。子どもの元気に助けられ、解放的を装っていても、保育集団が閉鎖的な所には、健全な保育が叶えられているとは思えない。それぞれの人権が大切に扱われることが当たり前でなければ、子どもの権利も意識されることはないだろう。

おわりに

人と人はことばを使って交わろうとする。然し、発せられた音声の意味を解釈することは、ことばの一部ではあっても、語っている全てではない。からだ全体が迎りの様子を含めまるごとで関わっている。子どもの前に並べたものが奇麗に揃えられていても、大人が隠そうとする矛盾を無意識に感じ取っている。真に人間らしい生き方を求める個人として、誇りのもてる保育を通し、この時代の子ども達と共に生きていきたい。